

Title	楊絳の散文 その5：「啓明で学ぶ」その3と「ルイ神父」
Sub Title	Two essays by Yang Jiang part 5 : My schooldays at Qiming Girl's School, part 3, Father Louis
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.18 (2025.) ,p.79- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20250331-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

楊絳の散文 その5

——「啓明で学ぶ」⁽¹⁾ その3と「ルイ神父」⁽²⁾ ——

櫻庭ゆみ子 訳

はじめに

本誌第十六号より連載の楊絳回想録、「啓明で学ぶ」の最終回と、同じく啓明女学校時代に可愛がってもらった一人の司祭との思い出をつづった一編「ルイ神父」を紹介する。「啓明で学ぶ」は前回と同じく『楊絳文集 2』に書き下ろしたものを底本とし、「ルイ神父」は『走在人生边上』収録のものを底本とする。⁽³⁾ また最後に作品を理解する助けとして、わかる範囲で初出を記した著訳年表を附した。

「啓明で学ぶ」は、二〇〇二年、楊絳九十歳の時に執筆され、回想録としては「幹校六記」「回憶我的父親」に次ぐ長さを持つ。楊絳が啓明女学校で学んだのは九歳から十二歳までの長くはない期間ではあったが、生きる姿勢を学んだと述懐するように、⁽⁴⁾ 啓明での三年半はその後の人生のバックボーンを形成する貴重な体験を積む時間だった

と言える。本誌第十七号で紹介したように、楊絳は一九九七年春に娘の錢瑗（一九三三—一九九七）を、続く一九九八年の末に夫、錢鍾書（一九一〇—一九九八）を亡くした直後から「パイドン」の翻訳に没頭し、錢鍾書の遺稿を整理しながら数編の回想録を発表した後、本誌第十四号で翻訳紹介した「懷念陳衡哲」と前後してこの回想録を書いたと思われる。これら錢鍾書の死後に書かれた文章は、一九八〇年発表の「幹校六記」を皮切りとする従来の回想録が冷静な観察眼と対象との程よい距離感の特徴としていたのに比して、全体に哀愁がより強く、特にこの「啓明で学ぶ」は、語り手の「私」と語られる「幼い私」との距離がぐんと近くなり、主観的な、時に感傷的な雰囲気漂わせている。楊絳の文章にしては珍しく、生身の書き手の整理されない正直な思いが垣間見えるのである。それだけ娘と夫との別れの衝撃がいかに強かったかがうかがわれる。この悲しみは「啓明で学ぶ」の数か月後にまとめられる『私たち三人』でようやく文字化されて昇華されていったように思われる。

「ルイ神父」は、『私たち三人』を刊行した二年のち、一時体調を崩して入院し、そのあと退院してから執筆を始めており、哲学談義「走在人生边上」に収められている。ここでの語り手はすでに人生の最後を見据えて落ち着いた境地で対象を語る。少女時代の思い出ということで言えば、楊絳とはほぼ同時代の作家・翻訳者、名編集者でもある石井桃子（一九〇七—二〇〇七）の『幼ものがたり』を思わせる感傷のない、しかししみじみとした情緒を感じさせる筆調である。

このルイ神父について、筆者はかつて楊絳女史からその後の詳細を問われたことがあり、たまたま見つけた写真が掲載されているサイトを紹介したことがある。当時はそれ以上の資料を見つけることができなかったのだが、ルイ神父なる人物への彼女のこだわりを感じて意外に思ったことを覚えている。カトリックとの関連を大っぴらに語れなかった時代にも記憶の宝物として心の奥底で磨き続けたのだろうか。

ところで「ルイ神父」の最後だが、こうまとめられている。

「ルイ神父が私に下さった食べ物も玩具も、そしてお話し下さった面白い物語も、おそらくは神父様のご苦労の多い生活に小さな喜びと楽しみを添えていたのである。」

当時はまだ珍しいチョコレートの入った秘密の箱を家に帰るまでは開けないようにと言い含めたルイ神父の考えを、「私」は克己心を養うためにとらえていた。ところがルイ神父は、皆でおいしいものを分かち合う些細な喜びこそ何にも代えがたい幸福であること、それを少女にわかつてもらいたいと願っていたのである。神父の言葉の真意を今悟ったと語り手は述べる。魂をめぐる哲学談義の「注釈」の一つとして記した「ルイ神父」が意味するところは、日常生活の中で他者との何気ない交流から生まれる人間本来の基本的な喜びは、表層的なゆがんだ道徳で縛られるものではなく、そうした些細な喜び、希望こそが人間を人間たらしめる貴重な心の動きである、ということだろうか。

楊絳は、好きな作家を問われたときに、英国桂冠詩人で児童文学の発展に大きく寄与したメイスフィールドの名を挙げ、特にその冒険小説を詩人だからこそ書ける素晴らしい文体の物語であると称賛している。^⑥メイスフィールドの作品は石井桃子も訳しており、同時代に生きた卓越した二人の書き手の趣向、人間観察の鋭さ、そして人間性への理解の深さには共通のものを感ずる。^⑦石井桃子には最晩年に語った「大人になったあなたが支えるのが子供の時の思い出」という有名な言葉がある。^⑧楊絳について言えば、啓明女学校での幼き日々の原体験が人生の基盤となり、その後降りかかった厳しい迫害をはねのけ、本来の生を全うする支えとなっていたと言えるのではないか。楊絳という作家の、幾多の苦難を前に最後まで折れなかった強靱な精神がどのようにして培われ、慰めと生きる力を与える宝となったのか、その一端をこの二編の幼年期の思い出語りは示しているように思われる。

「啓明で学ぶ」その3

中国語の授業を管理するのはシスター依¹だった。授業は担当せず、忙しそうにしていた。シスター依は背が高く、痩せぎすで老いてもおり、頬のこけた長い顔に強度の近視のメガネをかけていた。皆がシスター依の「ダーリン」だということを知っていた。昼食時、シスター依はよく食堂に見回りにやってきた。そして必ず私の横で立ち止まり、私の箸を手を取っておかずを取り分けてくれた。また私に手袋を編むために大姐に毛糸を買うように言い、大姐が人に頼んで真っ赤な毛糸を二かせ購入すると、シスター依は歩きながら十本の指を忙しく動かして指の先が出る手袋を編んでくれた。私は冬のあいだずっとこの小さな真っ赤な手袋を使ったのだった。

シスター依には助手がいらない。彼女が頼んだ鄒先生は上海の名士で、五十年前に何其芳⁹氏の文章の中に先生のお名前を見かけたことがある。今では誰もその名に言及しなくなってしまった。ただ先生の別号が「酒丐」だったことは覚えていた。先生のお名前のほうは、生徒だったこの私が思い出せなくなってしまったのだ。

鄒先生は上級クラスの学生に四六駢儷¹⁰文を読ませ、詩も作らせた。三姐は中級クラスだったので、何を学んだのか私は知らない。私は入学前に試験を受けて中級に編入していた。鄒先生が教える最年少クラスで、『孟子』を読み、各段を暗唱しなければならなかった。私たちチビ助たちは午前十時頃に一度、小休憩で外に遊びに出された。私は中級クラスの授業に出ていたので、大姐は外に出ることを許さなかった。私は憤懣^{まん}やるかたなしだったが、暗唱がうまくできないことも心配だった。姉は「覚える必要はないから、十回読みなさい、そうしたら遊びに出ていいわよ」と言って、私が数を数えられるよう付箋を作り、一から十まで一枚ずつ番号を振った。私は付箋を本の下

に置き、一回読み終えるごとに一枚付箋を取り出した。十回読み切ると姉はフルーツキャンディーを一粒くれ、それをなめながら外へ出ることを許してくれた。言われた通りに十回読むと、翌日には暗唱できるようになっていた。今でも諳んずることができる。

鄒先生が授業を担当される時はいつも一人のシスターが教室の後ろの隅に座って聴講し、午後に私たちのためにおさらいをしてくれた。私は最前列の真ん中、つまり鄒先生の目の前に座り、そして背後にはシスターの監視がついたのだが、それでもひそかに内職をした。六十センチほどの細いひもを輪にしたものが私のおもちゃだった。今思うと、授業中にきちんと聞かずにこっそり遊ぶくせは啓明で覚えた最も悪い習慣である。その後学校が変わり、何人かの名教師に国文を教わったが、いつもきちんと聞かずに内職をしていた。今さらだが後悔先に立たず、である。

鄒先生のクラスでは作文は教室でやり終えなければならなかった。ある時「惜陰」という題目が出された。私は出まかせに「古之聖賢豪傑、皆知惜陰」「古の聖賢豪傑は、皆惜陰を知る」とやったところ、シスター依が答案用紙を見た後で「季康ちゃんは『明悟』だ」、「好来」「すごい出来である」と称賛して触れ回った。「明悟」というのも啓明特有の表現であり、「好来」は上海語で「素晴らしい」の意。おかげで大姐からお小言を食らう羽目になった。「頭がいいなんていい気になるんじゃないのよ」と叱られたのだ。頭がいいとうぬばれる状況では全くなかったのだが。鄒先生のクラスでは、私はよくても七十点あたりを上下する生徒だった。先生が出される対句は、二文字であれば何とか合わせられたが、三文字になるともう駄目だった。ある時は「星」という字を書き間違えて、漢字のてっぺんにはらいを入れてしまった。私がクラス一番小さいチビ助であり、差し控える必要がないとみて先生は皮肉たっぷりに、「白」の頭に戴いた『星』なぞ見たことないわい！ 本来なら七十点やってもいいところだが、六十点で十分だ」と言われたのだ。点数など私はまったく気にしなかったし、「お楽しみの内職」にも先生は

お氣付きにならなかったのも、先生を嫌いになることはなかった。のちに先生はさらに年を取られ、教壇に立つた
びに「息子が甲斐性なしだ」とため息をつかれた。ある時には額に絆創膏を貼っておいでになった。なんでも息子
に何か投げつけられてできた傷だということだった。そのあと授業に來られなくなった。代わりに來たのは若いハ
ンサムな男性教員だった。なぜだかわからないが私はこの教員に嫌悪感を覚えた。彼は私たちに韓愈を読ませた。
なぜ嫌悪感を覚えるのか理由がわからないのだが、ともかく純粹に嫌悪の情で、それも尋常ならざる強さだった。
今思うに、この教師の両目が鋭くて、ひとりひとりを見据えたからかもしれない。そうされると少女は反感を覚え
るものだろうから。

ある時、「月の初めの礼拝」に二人の姉と一緒に帰宅する途中、私は停車場に向かう道すがら鄒先生が沙角菱
「ヒシの実」を売る屋台のわきに立ってそそくさと沙角菱を食べている姿を目にした。（先生の）白いあごひげのあ
ちこちにゆでた実のかけらがついている。私はなんだか悲しくなった。鄒先生がとても哀れに思えたのだ。沙角菱
を食べるのは別に憐れむことではない。おそらく先生が座らずに、だれかと一緒に食べていたのでもなく、一人風
の吹きすさぶ中で、盗み食いでもするようにあたふたと食べていたからではないだろうか。鄒先生を思い出すたび
にこの光景が浮かび、先生がとても哀れに思えた。

私はよく大姐が先生方とシスター依についてあれこれ議論しては、「不適切だ」と結論付けるのを耳にした。私
はとても不愉快で、シスター依をかばうべきだという気がした。シスター依は私をかわいがってくれているのだ。
彼女が悪く言われているときにかばわないのは、なんだか自分に良心がないように思えた。シスターにはとても感
謝していた。神業のように十本の指を動かして私のために手袋を編んで下さったし、私のためにおかずを取ってく
れ、何かあると褒めて下さった。みな覚えている。けれども本心を言えば、シスター依の「ダーリン」にはなりた

くなかった。というのは彼女のことが好きなわけではなかったからだ。このことは姉さんたちに言いたくなかったし、誰にも話したことはない。ただシスター依を思い出すたびにいつも胸の内に申し訳ないという気持ちがおきた。それからもう一人シスター珍^{ジェン}が私を好いてくれた。シスター珍とは鄒先生の授業の時に後ろに座り、後で私たちにおさらいをしてくれたあのシスターである。私たちの歴史の授業も彼女が教えてくれた。今でもシスターが歴史の授業で話してくれた「和珅跌倒、嘉慶吃饱」⁽¹¹⁾を覚えている。なぜかわからないが彼女は生徒たちに人氣がなかった。シスターが時々顔に赤い吹き出物をこしらえると、皆が「赤豆粽」⁽¹²⁾とはやし立てた。誰も私が彼女の「ダーリン」⁽¹³⁾だとは言わなかったが、シスターは私が彼女の「ダーリン」であることを態度で示していた。

日曜日の「散歩」で、私はいつもシスターが率いる子供たちのグループに振り分けられた（私の友とは違うグループだった）。ある時、おそらく一九二一年の春か秋だったと思うが、私たちは「散歩」で私邸の庭園に遊びに行った。この庭園は私たちがよく行くところだった。おそらくこの家の子女が修道会に入りそれで教会に寄付したということなのだろう。庭園の入り口には車庫があり、庭園内には干土がった池があつて泥の表面にはすでに亀裂が入っていた。池には石橋がかかり、傍らに築山、裏手に庁堂^{ホール}⁽¹²⁾があつた。シスター珍は私と他の数人の子供たちをお相伴に庁堂に連れて行った。私は手持無沙汰だったが、ほかに友人がいるわけでもなかった。と、突然二人の子供があたふたと駆けつけて来ると、大変なことが起きたから来てくれ、と私に告げた。一人の子供が池に入つて泥に足を取られたらしい。シスターは「意気地なし」⁽¹³⁾は放っておきなさい、と言ったが、私は「泥の中に放っておくの？」と公然と逆らつた。そしてシスターの止めるのを振り切り、急を告げに來た子供と一緒に現場に駆けつけた。実のところ私は子供たちと年はそう変わらず、ただ級が上だったので、それで皆が助けを求めに來たのだつた。

池に入り込んだ子供はすでに泥の中から抜けだしており、向かい岸に立つて泣いていた。池の泥は泥とは言つて

も半ば乾いており膝頭の上までくることはなく、服にも泥はついていなかったが、ズボンは泥だらけだった。この子が履いていたのはボタン付きのバンドで止める革靴で、片方のボタンが取れて靴が泥の中に落ちてしまったのだ。私が現場に到着した時すでに何人かの子供たちが長い竹竿を一本見つけ、池の足あとがついたところから泥にはまった靴を釣り上げていた。竹竿のてっぺんに高々と掲げられた後に落ちてきたのは、泥がいっぱい詰まった靴だった。集まった子供たちは期待いっぱい眼差しで私を見た。

私は必死になって考えた。泥は泥でもそれほど湿つてはいないのだから中のズボンにまで染み込んではいない。

革靴はざつと水をかければいい（車庫の中に蛇口があった）。残った問題は靴下だった。あの時代、靴下を履かないのは言語道断で、服を着ないのと同じだとみなされた。私たちは早朝服を着る際みな一斉にベッドの垂れ幕を開ける。それは一つには寝る前に脱いだ服がすべてベッドの前の腰掛に置いてあったためと、また垂れ幕のなかはむつとするからで、それで幕を開けたままで着替えをするのだ。私はたまたま一人が靴下を二重にはくのを見かけたし、よく靴下を重ねて履く者がいることも耳にしていた。必死になって考えたおかげで思い至ったのだ。私はすぐさま命令を発した。「泥のズボンを下に巻きながらおろして、泥の靴下も巻きとって、脱いだズボンと一緒に丸めて。誰か靴下を重ねて履いている人がいたら一足脱いで貸してあげて（そして確かに靴下を重ねて履いている者が、二人いたのだ）。革靴は車庫の蛇口で洗い流して。みんなで自分のハンカチで靴を拭いてやつて」。私はたちまち小鬼たちの大王になった。

皆が一斉に私の言ったとおりに動くと、たちまちすべての問題が解決した。ただ例の革靴は勢いよく水をかけたために水分をたっぷり吸いこんでしまった。そこで私たちはまずボロ紙を見つけてきて靴をきれいに拭いた後で、それぞれが差し出したハンカチを使った。ハンカチの数は多かったがどれもサイズが小さかったので、靴は生乾き

のまま履いた。笛の合図で帰りの列を組む時には、災難にあった子は黒い制服のスボンではなく、緑の花柄の内ズボン姿で、制服の黒いスボンはわきの下に抱えられていた（裏側に泥はついていない）。この子はシスターに「意気地なし」とお小言を食らっただけで済んだのだった。

一群のチビ助たちは私がシスターに逆らったので、私のことを心配した。そして学校に戻ると、何とかして長い廊下に草で編んだひもをわたして「赤豆粽」を転ばそうと額を寄せ合い夢中で相談している。私は彼女たちが実に「子供っぽい」と思った。それでも確かに少々不安になり、姉たちには報告せずにいた。

私は何かの必要がある時は三姐には告げない。彼女は二階に上がると常に一人の友人と一緒にいた。朝には私は三姐が髪をとかしてくれるのを待つ——四つに分けた髪をざっと大小二本ずつの束にまとめた後、大姐は忙しくしてかまっていられなくなるし、三姐は友と互いに髪を結いあうので、いつまでたっても私まで手が回らない。私は髪をたらしただまま待つのが嫌になり、二人をまねて自分でやってみた。まず小さいお下げをピンでとめ編む必要を無くし、それから頭髪を三つに分け、それぞれの手に一束、口も手のかわりに使って試してみると、お下げが編みあがった。三姐は「曲がってないね、まっすぐ、合格!」といった。こうして私は自分で髪を結うことになった。九歳でお下げを編むことができる、ととても誇らしかった。

夜私が一番早く二階に上がるため、大姐は油絵の筆を洗うのを手伝ってくれと私に頼んだ。冷水で石鹸をつけて筆を洗うのはなかなか大変だった。そして大姐が二階に上がってくる時はよく友人と一緒にだった。それでシスター珍に口答えをしたことを話した時は数日経っていた。シスター珍はシスター札に報告するだろうかと大姐に尋ねたところ、彼女は「そんな大それたことはしないわよ」と言った。私も間もなくこの件を忘れてしまった。

ただ、私はあつという間にチビ助たちに大王と祭り上げられ、いい気分になっていた。このチビ助たちのグルー

プは私を遊びに誘い出し、私も一緒になつてバカ騒ぎをやった。そのうち転んでまた膝頭をすりむくと、頭も冷め、彼女たちと一緒に遊ぶ気もうせて避けるようになり、以前のように私の友と「散歩」に出かけるようになった。こうして膝頭をすりむくこともあまりなくなつた。

学校には最上階の三階に病室が設けてあつた。病気を診るシスターは外国人で、太い真つ黒な眉毛をしていた。私たちチビ助は誰よりも彼女を恐れていた。私たちが齒が痛くなれば、彼女は口を開けて見せるように言うのだが、その口を閉じるまもなく齒は鉗子で抜かれている。のどが痛くなつた時にも、技ありだつた。ヨードか何かの薬を含ませた綿棒でのどをさつとこする。大変つらいのだが、とても効果があり、たちまちよくなつた。もし微熱でも出そうものならひどい目に遭つた。ヒマシ油を飲まされたうえ、水を飲まねばならなかつたのだ。また、病気になる子供は塩漬け橄欖^{かんらん}だけしか食べられなかつた。しよっぱいので水をたくさん飲むことになる。私たちチビ助たちは何があつても仮病を使うことはなかつた。

啓明での最後の学期、夜のおさらいの時間に一人の「^{まけ}鬻を結つた」⁽¹⁾学生が私を傍らに呼び、私をおだてては英文の手紙の内容を訳させ、また代筆で英文の下書きを頼むことがよくあつた。大姐が奇妙に思い、なんと書いてあるのか私に尋ねた。私があるのままだにこたえと、大姐は面白がつて笑いながら三姐に、季康が誰かさんにラブレターを書いてあげてるわと言うのが聞こえた。啓明の学生に手紙が来たときは、すべて学校側で指名したシスターが開封することになっていた。このシスターは英語は読めなかつたのである。とはいふものの今でも私は自分が訳した英文の手紙が何を言っていたのか、また下書きした返信の手紙のどの文句が「ラブレター」になるのかわからなかつた。自分に代筆でラブレターを書くほどの英語力があつたとは限らないが、ただうまい具合に事情を理解しない子供だつたというだけのことなのだろう。彼女は、私より年のいった子供は信用できないとみていたから。

一九二三年の夏、我が家は蘇州に引越し、私も蘇州の学校に通うことになった。のちに偶然、大姐の机の引き出しから啓明女学校の記念品を二つ見つけた。一つは劇の写真だった。演じられたのはオペレッタ「奥様の一週間」(月曜日に洗濯、火曜日にアイロン、水曜日は何もせず、セーターを編みながらお隣のご婦人をおしゃべりする……)で、私が演じたのは水曜日の主婦だった。写真の私は外国の人形のようにでたちだったが、演じたのは主婦だから滑稽にみえる。当時私は歌いながら演技をし、自分で自分は見えない。啓明にいた頃の私がどんな様子だったのか自分ではわからない。大姐が保管していた写真は大変興味深かった。もう一つは私の英語の期末試験の答案である。啓明の期末試験の答案用紙は綺麗な大ぶりの方眼用紙だった。試験問題は、上級生が極太の黒の万年筆を使いゴシック体で書いた。自分の期末試験の答案を見た時、「物理」の小テストの答案用紙を見た時のような驚きがあった。それは、例の、シスター列がほかの生徒の答案を盗み見て私に教えてくれた試験の時のものである。もっとも彼女はヒントをくれただけで、語句はすべて私自身のものであるが。自分がこんなにきちんとした答案を書くことができたとは思ひもしなかった。道理で大姐がわざわざ願いでてとっておいたわけだ。もし私が引き続き啓明で学んでいたら、私の外国語はもっと高いレベルになっていたに違いない。

啓明で学んでいた頃の話を私はよく鍾書に語った。彼は聞かたびに感嘆して「君の幼年期は僕よりずっと楽しそうだねえ。僕の小さい頃は、思ひ出さなければそれまでだけど、思ひ出すと嫌なことばかり。家では不器用で失敗ばかりして、怒られどおし。数学の出来が悪くて、学校といえは怖くてたまらなかつたよ」。鍾書が「書いておきなよ」と言うこともあったが、私は断片をとぎれとぎれに話して聞かせるだけで、書くのを面倒がついてた。今では誰も聞いてくれるものがいなくなりました。過ぎ去った昔が懐かしくそれで思ひ出しては書き留めてみたというわけである。

一九八七年、母校百二十周年記念を祝つての記念冊子が届いた。啓明女学校はすでに上海市第四中学に変わり、もとの「女学校」あるいは「女塾」は完全に消えてしまった。記念冊子には学校の建物の写真があった。教学大樓と長い廊下は原型をとどめており、それを目にして昔のことが次々と思い浮かんできた。ただあれからさらに十五年が過ぎている。教学大樓と長い廊下はまだあるのだろうか。ジャンプした十段の階段は、確かに十段だったのだろうか。数えに行こうかとさえ思っている。

二〇〇二年三月二三日 定稿。

ルイ神父

小さい頃、家族のほかに一番好きだったのがルイ神父である。なぜなのかは自分でもわからない。もしかすると大姐が私と三姐を連れて挨拶に行く毎に、手ぶらでは戻らなかったからかもしれない。持っていた洋風の小物はどれもルイ神父からいただいたものだった。かといって私が他では可愛がられない子供だったわけではない。家ではちやほやされたし、学校では先生や上級生がひいきにしてくれた。今思うに、おそらくルイ神父が私を気に入ってくれたから私もルイ神父が好きだったのだろう。

ルイ神父が最初にプレゼントして下さった封筒ほどの大きさの刺繍布は洋風のものではない。白地の絹に赤い上着、緑色のズボンに赤い靴を履いた少女が扇子を手にして椅子に座り涼んでいる姿が刺繍してあった。上にカードが添えられ、フランス語で「次の学期また勉学に勤しむ前にまずはよく休みましょう」「一番下の妹さんに」と書かれてあった。カードは大姐に宛てたもので、飾り文字の書名の横に小鳥が数羽描かれ、上部の隅に十字架の印が

あった。神父様はまた反故紙からほどよい大きさの白い紙を切り取り、二つ折りにして刺繍とカードをその間に入れて下さったが、上に漢字の「小」が書いてあった。時間をかけて書かれたものである。三姐がもらった布の刺繍は五人の男の子がとんぼ返りをしているもので、私のものよりずっと精巧な作りだった。三姐の刺繍布はとうの昔にどこかにいつてしまったが、私のは今でもきれいなまま残っている。神父様が本当に好きだったから、こんなに大切にあってあったのだと思う。

初めてお会いした時、神父様は、大姐とはフランス語、三姐とは英語、私とは中国語でお話するねと仰った。神父様の上海語は外国語なまりがあり、私と一番多く話されたし、それがみなとても面白かったので、神父様は私のお気に入りの友人となった。

神父様が下さった洋風玩具は確かに我が家にはないものだった。例えば小箱の蓋を開けると中から飛び出してくる「玩偶盒」(Jack-in-the-box)「びっくり箱」は、木の小箱の中に鉄製の水鳥や小舟が入っており、外に馬蹄型の磁石がついて、遊ぶときは洗面器に水を張り、鉄製の小物を水に浮かべ、磁石を指で押すと水面に広がって浮かぶ水鳥や小舟が一行になり、私の指示に従った。これらの玩具は家に置いて弟や妹たちに遊ばせているうちにどこかに行ってしまった。

一九二一年の夏休み前、九歳だった私は、家に戻って誕生日を迎えれば十歳だった。ルイ神父は私に白い紙の包みを下さったが、中に小さな箱が入っているようだった。神父様はアダムとイヴの楽園追放の話を知っているかい、とお尋ねになった。私は大姐が私の机の天板下に入れておいた中国語版『旧約聖書』をこっそり読んでおり、読み終えてはいなかったもののこの物語はよく知っていた。⁽¹⁶⁾ルイ神父は「いい子だ、ではもう一つお話をしてあげよう」と仰って次のようなお話をされた。

「昔一人の乞食がおって、城壁の門のすみで先祖様を罵ってな、禁断の実を盗んで食べたついで俺は満足に飯にすらありつけねえ、朝から晩まで物乞いしたって腹は空っぽだ、と言っておってな。ちようどそこに一人の王子が通りかかって乞食の言うことを耳にし、乞食を宮殿に招いてまずは風呂に入らせ、それからきれいな着物に着かえさせると豪華な寝室へと案内したんだよ。ベッドには真っ白でふかふかの布団が敷いてあって、王子は『これがお前の寝室だ』と言ひ、そのあとで食堂に連れて行つた。食卓ではうまそうな香りが漂いホカホカ湯気の立つごちそうが並んでおって、王子は『お前のごちそうだ。お前は私の客人だからな。十分に飲み食いし、着飾り、たっぷり寝なさい。ただし一つしてはいけないことがある。もし言いつけを破ればすぐに王宮から追い出すからな』と言ひ、それから食卓の中央におかれた銀の蓋のついた皿を指して『この皿の中の料理だが、絶対に食べてはならない。食べたならば直ぐ王宮から追い出されることになるからな』と言つたんだ。乞食は王宮でたっぷりとおいしいものを食べ、美しい着物を着て十分に寝ることができた。毎日がとても楽しかったのだが、どうしても銀の蓋の皿の料理が何なのか知りたくてむずむずしていた。二日経つともうどうしても我慢できなくなり、食べやしないさ、ちらっと隙間から覗いてみるだけだ、と胸の内でも思つたんだ。ところがそつとふたを持ち上げたたん、銀のふたの下から一匹のネズミが飛び出し、あつという間に姿が見えなくなつてしまった。テーブルの真ん中のその皿の中身はなくなつてしまつたわけだ。乞食は直ちに王宮を追い出されたとさ」。

ルイ神父が「わかつたかい」と私に尋ねた。

私は「はい、わかりました」と答えた。

神父様はその白い紙包みを渡しながらおっしゃつた。「この包みは家に持ち帰るための私からのプレゼントだよ。いいかい、よくお聞き。汽車に乗り込む前は開けてはだめだよ」。私は神妙な面持ちで包みを受け取つた。

ルイ神父のところから学校に戻ると、大姐と多くの同僚——つまり私の先生たちには、私がこの包みをもらったことが知れ渡っていた。先生たちはつついたり、ゆすったり、嗅いでみたりしながら、みな関心を寄せて言うのだった。「包みの中身はキャンディーに決まっている。こんな暑い気温では、包みの中で溶けたり柔らかくなったりしてダメになっちゃうわよ」と口々に言った。私はそつと大姐に「ほんとう？」と尋ねると、彼女はひとことだけ「ルイ神父様はなんとおっしゃったのだっけ」と答えた。私はルイ神父がおっしゃったことをしっかりと覚えこんで、先生たちが何と言おうと、なんとおだてようとその手に乗らなかつた。ただ中に何が入っているのか気になつて仕方がなかつた。

その時の帰省は、私たち姉妹三人とそれから大姐の同僚の許先生と一緒に無錫に帰ることになっていた。四人が汽車に乗り込むと私はもう待ちきれず、大姐に紙包みを開けてとお願ひした。大姐は「これは『短距離の列車』だから、『汽車』には含まないわよ」と答えた。（当時、徐家匯から上海駅へと向かう途中に「小駅」があつた。とうの昔になくなり、今はない。）私は我慢するしかなく、ようやくのことで上海から無錫行きの列車に乗り込んだ。そしてすぐに大姐に包みを開けるよう頼んだのだつた。

大姐が包みを開くと中にまた包みがあり、それを破つて開けるとさらにまた包みがあつた。こうして一枚、また一枚と重ねられ紙はボール紙、新聞紙、文字を書き破つた反故紙など様々で、厚いもの、薄いもの、硬いもの、柔らかいもの……いずれも糊でしっかりと貼り固めてあつた。大姐は許先生と一枚一枚破つていったが、しまいには笑い出してしまった。大変な苦勞の末、二人はついに十七、八層の包みをはがして中から精巧で美しい小箱を取り出した。チョコレート箱だつた。大姐はふたを開けるとまず許先生に一粒すすめ、それから私に一粒、三姐に一粒、そして自分でも一粒つまんだ後、ふたをして「これはうちに持ち帰つてお父様とお母様と一緒に食べましょう

ね」と言ったのだった。そして、「チヨコレートはあなたに、小箱は私に頂戴ね、どう？」と商談を持ち掛けた。私は領いて承諾した。チヨコレートはとてもおいしかった。こんなにおいしいチヨコレートはそれまで食べたことがないように思えた。家に戻り父や母と一緒に味わった時には、本当においしかった。私は食い意地の張った子供だったが、両親や家族と一緒に食えることができたことで、ことさらおいしく感じられたのだった。

一九三〇年の春休み、上海に住む中学時代の親友が、私と私の別の友人に遊びに来るよう誘ってくれた。私は上海に着くと、ついでに母校の恩師や学友に会いに一人啓明を訪れることにした。大姐はまだ啓明で教えていた。長い廊下の東端にある中文教室の前ではシスター・依が早くから待つており、「小季康にちよつと会いに」出迎えてくれており、十三、四歳の少女たちが「小季康」を見に飛び出してきた。すでに満十八歳を数えた私は大学二年生である。なにか「小季康」だか。シスター・依が生徒を教室の中に押し戻したところで、ルイ神父が長い廊下の西端からやつてくるのが見えた。大姐によるとルイ神父は私が啓明に来ることを知ってわざわざ会いにいらしたのだという。神父様はすでに八十歳になっておられ、あごのひげは真つ白だった。私を見て大変喜ばれ、大学で何を学んでいるのか尋ねた。私が、どんな科目の授業に出ているか答え、そのうち論理学もあります——ここで使ったのは英語の Logic である——と言ったところ、神父様は驚きとともに感慨深げに、「オオ、ロジック、ロジック」とおっしゃった。私が、北斗七星は八つの星から成り立っているのだ云々と少しばかりかじった天文学の知識を披露すると、ルイ神父は笑って「わたしの天文台においで。一晩星を見せてあげよう」と言ったあと何気なく「実はね、もう少して死ぬかもしれないかったんだ。まもなく帰国するんだよ。もう戻ってこないんだ」と言い添えた。帰国とはそこに骨を埋めるおつもりなのだろう。神父様は私の肩をそつと抱いて「ルイ神父を忘れないでくれ」と言われた。私は胸が苦しくなり、言葉がつかえてただ頷くだけだった。当時神父様が八十歳、私が十八歳。ルイ神父は私

が慕った方だ。今でもしよっちゅう懐かしくてたまらなくなる。

私が九十歳になったその年、鍾書はすでに逝き、一人ベッドに横たわって眠れないでいた時、ふとルイ神父がチョコレートチョコレートの小箱を下さったときに言われた物語を思い出し、突然、それまで考えもしなかったことに気が付いた。当時はルイ神父は人間としてゆるぎなく、誘惑に負けないようにと励まして下さっているのだと考えていた。誘惑に打ち勝てるように十七、八枚と反故紙を重ねて張り付け、仮に私が誘惑に負けて三枚、四枚とはがしてしまってもまだ悔い改めるチャンスがあるようにと。しかしルイ神父の真意を私は少しもわかっていなかったのだった。

九十歳になって一人横たわっていた時に、突然九歳の時のルイ神父のあの禁令の意味を悟ったのである。神父様は私があのチョコレートチョコレートの箱を家まで持ち帰り両親と一緒に味わい楽しむことができるようにとずっと願っていたのである。もし私が大姐と多くの同僚の前で包みを開けてしまったら、大姐は皆に一粒ずつ上げねばならなくなるだろう。皆に一氣に食べつくされてしまわないとも限らない。そうなれば乞食が王宮から放逐されたように私は何もかも失ってしまうのではないか。九歳で聞いた話の真意を九十歳になってようやく悟るとは、なんたる愚か者、なんたるたわけ者！

ある本に、修行中の僧侶が半飢餓状態の食事しかとらず、夜も体を伸ばして眠りにつくことをせずただ墓こぼ座の上で座って居眠りするだけだとあった。ルイ神父もお眠りにならなかつた。ようやくとった貴重なお休みの時間を割いて私へのプレゼントのチョコレートチョコレートの箱を十七、八枚の反故紙で包んで下さったのである。ルイ神父が私に下さった食べ物も玩具も、そしてお話しくださった面白い物語も、おそらくは神父様のご苦勞の多い生活に小さな喜びと楽しみを添えていたのである。

三月三日 定稿。

- (1) 原文タイトルは「我在啓明上学」「楊絳文集」散文卷上、人民文学出版社、二〇〇四年。
- (2) 原文タイトルは「勞神父」「走在人生辺上・自問自答」商務印書館、二〇〇七年。勞神父とは、フランス人イエズス会宣教師。中国語名、勞積勛。本名 R. P. Louis Fric (一八五八・一九三二年)。一八八三年訪中、徐家滙天文台で助手として働く。その後いったんフランスに戻り神学及び数学等を修め一八九五年再訪、一八九六年より約三十年間天文台台長を務め、台風の研究に尽力し、「台風之父」と呼ばれる。徐家滙天文台を代表して欧州及び日本で開催された気象学会に出席、気象学における貢献に対し中仏両国から表彰されている。一九三一年八月病氣療養のため帰国。一九三二年十月、パリにて死去。参考「徐家滙天文臺勞神父之榮譽」『聖教雜誌』一九三一年第二十卷第十期。及び「勞神父逝世帰天」『申報』一九三二年十月二十二日。
- (3) 「走在人生辺上」(人生の際まで来て) は自問自答しながら魂の存在をめぐって考察を進める哲学問答風の散文である。その序文で楊絳は、思索を進めていくうちにいくつかの散文のタイトルを思いつき、本文を書きつつそれらを本文の「注釈」とみなして(それらの散文を)書いていったという。本文に附された「注釈」は全十四編あり、「ルイ神父」はそのうちの第三編目にあたる。原文タイトルは「勞神父」。
- (4) 吳学昭『聴楊絳談往事』生活・読書・新知三聯書店、二〇〇八年、三四―三五頁。聞き手(吳学昭)の啓明での三年余りの生活での主な収穫は何かという質問に、一つは中国語、英語及びその他の学科の基礎を叩き込まれたことがあるが、もっとも重要なものは、独立した社会的能力(「生活能力」)を鍛錬し培われたこと、それは、自ら判断し、自制を学び、他者や集団と正しく相いれる等を含む生活力である、と答えている。
- (5) このうち「狼和狈的故事(狼と狈の話)」は「楊絳の語り 散文七編」『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』(第三八号、二〇二三年六月)に、「难忘的一天(忘れられない一日)」『慶應義塾大学日吉紀要 中国研究』第十六号、二〇二三年三月)にそれぞれ翻訳紹介している。また錢鍾書の死後九か月後に発表された「從滲沙子」到「流亡」(一九九六年九月十六日執筆。初出は『南報周報』一九九九年十一月十九日。のち『魯迅研究月刊』一九九九年十二月号掲載。その後単行本『從丙午到「流亡」』(中国青年出版社、二〇〇〇年収録)は下放から自宅に戻ったものの、割っ

て入居してきた一家と揉め事となり、夫婦で密かに娘の寮に引越す顛末を記したものの。娘を守って文字通り「奮戦」する楊絳・錢鍾書夫婦の姿が活写され、楊絳自身も含め登場する人々の姿態が余すところなく描き出されている。その後モデル問題で物議をかもした経緯もあつてか、文集、全集いずれにも収められていない。

- (6) 注(4) 前掲書、一〇八頁。具体的には、*Sard Harber* (1924) と *ODTAA* (1926) をあげている。

- (7) 楊絳は一九五八年十二月発行の『文学知識』創刊号に「描写敢想敢做の小説——介紹『神秘島』」と題し、ジュール・ヴェルヌが一八七四年に発表した冒険小説(邦題)「神秘の島」の書評を書いている。これは当時大躍進政策の真つただ中であつて、毛沢東の「破除迷信、解放思想、發揚敢想敢說敢做的創造」(迷信を破り、思想を開放し、あえて考え、話し、やるという創造的な精神を發揚する)の言葉を巧みに使つての巧妙かつ大胆な書評であるが、それはさておきここで強調したいのは彼女の児童文学への目配りあるいは趣向である。文化大革命後一九八五年に『北京晚報』に「ドン・キホーテ」のアニメーション放映にあたつて子供たちに向けて話の紹介をしており(年表一九八五年参照)、児童文学における想像力と言葉のリズムの重要性を考えると、楊絳のいくつかの散文との共通項が見えてくる。石井桃子との接点は、*Mascheru* を介して見えてきたものであるが、楊絳と石井桃子というともに百年以上を生き抜いた二人の異文化接触におけるそれぞれの受容過程を比較考察すれば、漢字文化圏における近代の別の様相が見えてくるだろうと考えている。

- (8) 二〇〇一年七月十八日(石井桃子九十四歳)に記された言葉。正確には、「子ども時代をしつかりとたのしんでください。おとなになつてから、老人になつてからあなたをささえてくれるのは子供時代の「あなた」です」。『石井桃子のことば』新潮社、二〇一四年。

- (9) 原文の敬称は「同志」である。微妙なニュアンスが伝わらないので「氏」とした。

- (10) 四字句、六字句の対句を基本にリズムや韻を重んじて、美辞麗句、典故を多用する美文調の韻文。

- (11) 「汚職で巨額の私財をため込んだ乾坤が倒されれば嘉慶の民は食うに困らなくなる」という巷で流行つた言。乾坤は乾隆帝の庇護のもとに権勢をふるつた家臣。乾隆帝の死後、後をついた嘉慶帝に汚職の罪で死罪となる。

- (12) 中国の伝統的な邸宅で客をもてなしたりする広間。

(13) ここでの中国語は「無志氣」で本誌十六号での原文「没志氣」とは文字が異なる。同じ意味だと思うが、ここでは「情けない」ではなく、「意気地なし」と訳した。

(14) つまり上級生。年によって髪形は異なり、上級生はおさげではなく後ろでお団子に髪をまとめた。「啓明で学ぶ」注4 前掲雑誌（本誌第十七号）参照。

(15) 米国マウント・ホリーヨーク・カレッジ及びイリノイ大学で学位を取った王季玉が、創始者である母親の意思を継いで発展させた振華女学校。ジョン・デューイの教育理念を取り入れ学術的な教育内容も充実していた。日中戦争で蘇州が陥落し、上海に移った分校の校長を楊絳は託され一時その任についているこの私設の女学校をモデルに楊絳は一九五〇年代短編小説「事業」を書いている。

(16) 本誌第十七号五一頁に、大姐が人から借りた聖書を楊絳の机に入れておいたのを楊絳が読んでしまうエピソードがある。

楊絳著訳年表

*主に作品理解のために必要と思われる小説、エッセイ、回想録、翻訳作品の目録を主とする年表である。
作成に当たっては上海図書館データベース『中文期刊全文数拠庫』（慶應義塾大学メディアセンターにて閲覧）、「楊絳生平与創作大事記」『楊絳文集』第八卷付録（人民文学出版社、二〇〇四年）等を参考にした。
作品については各作品に日付が附されているものはそれに従っている。執筆時期の記載がないものは、わかる範囲で初出雑誌をあげてある。必要に応じて「」で日本語注釈を附した。尚、単行本の版本比較は省略している。

- 一九三〇年 一月十日、散文「倒影」執筆。『東吳年刊』第二期、三六一—三六二頁。署名は含真。
- 一九三一年 東吳大学の他の二人の学生と共同執筆の調査報告「蘇州鉄業概観」、『老少年』（一九三一年第八卷第二期、三期）。署名は楊季康。
- 一九三三年 六月、翻訳「共產主義は不可避免的嗎」『新月』（第四卷第七期）。署名は楊季康。原文F. S. Marvin, "Is Communism Inevitable?" *Hibbert Journal*, 31, n. 1, London: 1932, 10.
- 一九三四年 九月十九日、小説「璐璐不用愁」執筆。『大公報 文芸副刊』（一九三五年八月二十日）のち林徽因主編『大公報叢書 小説選』に「路路」として収録。署名は楊季康。
- 一九三六年 オックスフォードにて散文「陰」執筆。文学雑誌『上海』（一九三七年、創刊号、一九七一—一九九頁）。署名は楊季康。
- 一九三九年 散文「風」『今日評論』（一九三九年第一卷代十期、一三一—一四頁）。署名は楊季康。
- 一九四〇年代 散文「喝茶」、「流浪児」執筆。
- 一九四三年 戯曲「称心如意」執筆。上演。戯曲『弄真成假』執筆。以降署名は楊絳。錢鍾書「圉城」執筆開始。
- 一九四四年 『称心如意』世界出版社より出版。
- 一九四五年 三月二十七日、父楊蔭杭死。

戯曲『弄誠成假』世界出版社より出版。散文「窗帘」「新語」(一九四五年第三期、二六頁)。「遊戯人間」上演。「風絮」上演予告。四月末か五月初め、日本軍憲兵の尋問を受ける。

一九四六年 小説 ROMANESQUE. 『文芸復興』(第一巻第一期、五一—六三頁)。戯曲『風絮』(第一幕、第二幕)『文芸復興』(第一巻第三期、二五六—二七四頁)。「風絮」(第三幕—第四幕)『文芸復興』(第一巻第四期、四九五—五〇五頁)。小説「小陽春」『文芸復興』(第二巻第一期、三八—四七頁)。秋、震旦女子文理学院、外文系教授。錢鍾書『圜城』完成。

一九四七年 『風絮』上海出版公司より出版。翻訳「随鉄大少回家」『觀察』一九四七年第二巻第十期、二二頁、一五頁。原文は Goldsmith, *The Citizen of the World*.

一九四八年 翻訳『一九三九年以来英国作品』『英国文化叢書』之一(商務印書館、一九四八年九月)。原文 John Hayward, *Prose literature since 1939*, London: Longmans Green, 1947. 錢鍾書『圜城』出版。

一九四九年 清華大学非常勤講師(兼任教授)として大学三年「英国小説」授業担当。

一九五〇年 『小癩子』[Lazarillo de Tormes ラサリーリョ・デ・トルメスの冒険]一九五〇年英語からの重訳。のち一九七八年九月、スペイン語より翻訳。単行本は一九七九年人民文学出版社より出版。

一九五四年 『吉尔、布拉斯』[ル・サージュ著「ジル・ブラス」]『世界文学』分期刊出。(未見)

一九五六年 『吉尔、布拉斯』人民文学出版社より出版。

同年(または一九五七年) アリストテレス『詩学』の重要名詞を錢鍾書とともに英訳等を参考に翻訳し、『詩学』翻訳担当の羅念生に提供する(羅念生訳『詩学』序参照)。

一九五七年 「菲爾丁関与小説的理論与实践」[「フィードディングの小説的理論与实践」(『文学評論』第二期)。外国古典文学名著叢書編集委員会より「堂吉訶德」[ドン・キホーテ]の翻訳を命じられる。この時は英語からの重訳。

一九五八年 錢鍾書『宋詩選注』および李健吾の文章と共に「菲爾丁関与小説的理論与实践」[「フィードディングの小説理論与实践」が批判される。スペイン語の自習を始める。

一九五八年 「描寫敢想敢做故事的小説——介紹『神秘島』」[「思い切って考え思い切ってやるお話することを描い

た小説——『神秘島』の紹介（書評）北京『文学知識』（一九五八年十月号、一六頁）。

一九五九年 「論薩克雷『名利場』「サツカレーの『虚栄の市』を論ず」『文学評論』一九五九年第三期。この論評が「红线贯穿」「社会主義の路線を堅持」していないと批判される。

一九六〇年 『スペイン語入門』を完読。ラテンアメリカ、スペイン語の小説を読み始める。

一九六二年 「芸術は困難克服——讀『紅樓夢』管窺」『文学評論』一九六二年第十二期。

一九六四年 「堂吉訶徳和『堂吉訶徳』」「ドン・キホーテと『ドン・キホーテ』」（『文学評論』一九六四年第六期）。

一九六五年 「堂吉訶徳」第一部の翻訳を完成させ、第二部の翻訳を始める。

一九六六年 錢鍾書他と翻訳編集「関与・形象思維・的資料輯要」「形式思惟」に関する資料提要』『古典文学理論訳叢』第十一冊。うち、楊絳はロペ・デ・ルエダの一六〇九年に行われたマドリッドでの講演録「編写喜劇的新芸術」の翻訳も担当する。八月、『堂吉訶徳』の訳稿（第一部および第二部の四分の三）を没収される。紅衛兵によって「陽陰頭」「頭髮の半分を剃られる」にされる迫害にあう。便所掃除をわりあてられ、「杜甫その他の詩を盗み読みする政治学習会が頻繁に開かれる。一九六八年三月四日、楊必（一番下の妹、『名利場』（虚栄の市）の翻訳者）上海で死亡。

一九六九年 十一月十一日、中国科学院の先発隊の一員として錢鍾書が河南省に下放。

一九七〇年 六月一日、『堂吉訶徳』の訳稿を取り返す。七月十二日、中国科学院の後発隊の一員として河南省に下放。

一九七二年 三月十二日 北京に戻る。八月『堂吉訶徳』を全面的に訳し直す。

一九七三年 十二月 師範大学の錢媛の宿舎に夫婦で一時移り住む。『從・抄・流亡』の背景。翻訳作業停止。

一九七四年 五月、中国社会科学院七号棟の事務室に移る。『堂吉訶徳』の翻訳を再開する。

一九七五年 四月五日『堂吉訶徳』初稿完成。五月十六日校正が完了し再校。

一九七六年 二月末『堂吉訶徳』、第一部定稿。七月二十八日、唐山地震、一時避難。九月九日、毛沢東死。十月六日、

「四人組」逮捕。十一月二十日『堂吉訶徳』第一、二部定稿。

一九七七年 二月四日、北京三里河南沙沟に転居。五月五日『堂吉訶徳』を人民文学出版社に渡す。印刷開始。五月十

三日、『小癩子』を原文のスペイン語から翻訳。十一月短編小説「大笑話」完成。

一九七八年 四月末『堂吉訶德』人民文学出版社より出版。九月『小癩子』人民文学出版社より出版。短編小説「玉人」完了。

一九七九年 六月五日—二十八日、代表団とともにフランス訪問。短編小説「鬼」完成。

一九七九年 十月『春泥集』上海文芸出版社より出版。収録作品は「菲爾丁の小説理論」「論薩克雷『名利場』」「芸術与克服困難——讀『紅樓夢』偶記」「李漁論戲劇機構」「堂吉訶德和『堂吉訶德』」「重讀『堂吉訶德』」。

一九八〇年 短編小説「事業」完成。二月「事實——故事——真実——讀小説漫論之二」完成、『文学評論』（一九八〇年第六期）掲載。一二月『幹校六記』完成。錢鍾書が序を寄せる。十月、『傳記伝記五種』代序」執筆。『倒影集』人民文学出版社より出版。

一九八一年 「旧書新解——讀薛雷絲蒂娜——讀小説漫論之二」（『文学評論』一九八一年第四期）掲載。

一九八二年 四月二三日「天上一日、人間一年」執筆、五月十七日「旧書新解——有什么好？——讀小説漫論之三」執筆。のち『文学評論』（一九八二年第六期）掲載。『吉尔、布拉斯』訳文の序執筆。のち加筆修正し二〇〇四年出版の単行本に収録。

一九八三年 五月「回憶我的父親」、六月「回憶我的姑母」執筆。十月「孟婆茶（『将飲茶』代序）執筆。十一月、スペイン訪問団に随行してスペイン訪問。

一九八四年 「介紹『小癩子』」「読書」（一九八四年第三期）。『喜劇两种』福建人民出版社より出版。収録作品は「称心如意」「弄真成偽」。三月「老王」「林奶奶」、七月「読『柯靈選集』」執筆。『堂吉訶德』譯余瑣掇」「読書」（一九八四年第五期）掲載。

一九八五年 『小癩子』スペイン語最新版を底本に旧訳を改訂、四月改訂終了。「写在《堂吉訶德》动画片放映之前」「ドン・キホーテ」動画の放映の前に『北京晚报』（一九八五年四月十五日、二十二日）。五月「幹校六記」日本語版序」執筆。『懷念石華父』執筆。十二月「記錢鍾書与围城」「錢鍾書と『围城』について記す」執筆。

一九八六年 四月五日『洗澡』『風呂』執筆開始。『小癩子』改訂再版。「失敗的經驗（試談翻譯）」「中国翻訳」（一九八

六年第五期)掲載。これはのち「翻訳的技巧」として『雜憶与雜寫』(北京・生活・讀書・新知三聯書店、一九九四年二月)収録。『記錢鍾書与「困城」』(湖南人民出版社、一九八六年五月)。十月「塞万提斯的戲言」[セルバンテスの冗談]執筆。『関与小説』生活・讀書・新知三聯書店より出版(一九八六年十一月)。収録作品は「事実——故事——真実」[旧書新解——讀「薛書絲蒂娜」]「有什么好?——讀奧斯丁的『傲慢与偏見』」[介紹「小癩子」]「補五点文」[「欣余的」五点文]。『回憶兩篇』(「回憶我的父親」、「回憶我的姑母」収録)湖南人民出版社より出版。『丙午丁未紀事』「收穫」(一九八六年第六期)掲載。十月、「ドン・キホーテ」の中国語訳の貢獻に対し、賢王アルフォンソ十世勲章を在中スペイン大使館にて受ける。

一九八七年 一月「紀念溫德先生」執筆。この年、社会科学院研究員退職。

九月『洗澡』脱稿、修正完了。『将飲茶』三聯書店より出版。

一九八八年 三月から四月にかけて「第一次觀礼」執筆。八月「大王廟」「遇仙」記、九月一日「憶高崇熙先生」、九月二日「吾々先生」執筆。九月「洗澡」脱稿。十二月「黒皮阿二」執筆。十一月、香港で、十二月北京で『洗澡』出版。

一九八九年 『堂吉訶德』繁体字版、台湾で出版。一月「讀書苦楽」、三月二十日「蘭姆談莎士比亞悲劇」、八月「客氣的日本人」、九月「闖禍的辺縁」、「花花兒」、「控訴大会」、十二月「一個婊子」執筆。

一九九〇年 『将飲茶』台湾で出版。六月「記楊必」[趙佩榮与強英雄]「阿福与阿靈」執筆。

一九九一年 一月「車過古戰場」順姐的「恋愛」、三月「一塊隕石」「小吹牛」、四月「第一次下郷」、三月「記似夢非夢」、五月「雜憶与雜写自序」執筆。

一九九二年 父親、楊蔭杭の遺稿『老圃遺文輯』を整理し、十月その「前言」を書く。

一九九三年 三月、錢鍾書入院、手術につきそう。十月、編輯を手伝った錢鍾書著『槐聚詩存』が出版。十一月十日「記章太炎先生談掌故」執筆。十二月『老圃遺文輯』が出版される。

一九九四年 この年錢鍾書の看病に追われる。四月一日「臨水人家」執筆。

一九九五年 九月『楊絳散文選集』百花文芸出版社より出版。

一九九七年 三月四日、娘、錢瑗死。五月十四日「方五妹和她的『我老頭子』」執筆。錢鍾書の看病に雇っていた女性の話の聞き書き「她的自述」執筆。十一月二十一日「錢鍾書對『錢鍾書書集』的態度」執筆。

一九九八年 四月「吳宓先生与錢鍾書」『人民日報』（一九九八年五月十四日）掲載。五月「錢鍾書離開西南聯大的实情」、八月「答宋璞『不得不說的話』」上海『文匯讀書周報』（一九九八年九月五日）掲載。十二月十九日、錢鍾書死。

一九九九年 九月十六日「從『摻沙子』到『流亡』」執筆。『南方周末』（一九九九年十一月十七、十八、十九日）掲載。『斐多』を英訳より翻訳、十二月十八日に翻訳完了。

二〇〇〇年 四月『斐多』遼寧人民出版社より出版。香港天地圖書公司より繁体字版出版。九月二十四日「狼和狼的事」執筆。

二〇〇一年 三月「我愛清華圖書館」『光明日報』（二〇〇一年三月二十六日）掲載。五月四日「『錢鍾書手稿集』序」執筆。十月十日「難忘的一天」執筆。十月二十二日「我在啓明上学」を書き始める。

二〇〇二年 三月二十日「懷念陳衡哲」定稿。八月十日「我在啓明上学」定稿。九月三十日「我們仨」「私たち三人」初稿。十月七日「記我的翻譯」、十月二十二日「記我的翻譯」執筆。十二月二十三、冬至に「我們仨」定稿。十二月三十日、「失敗的經驗」を修正、「翻訳的技巧」と題する。

二〇〇三年 『堂吉訶德』を『楊絳文集』収録時に多少修正。四月二日「陳光甫的故事二則」、五月「『困城』漢英對照本前言」、六月「我的書房」執筆。七月「我們仨」生活・讀書・新知三聯書店より出版。

二〇〇四年 四月一日「不官不商書香」執筆。四月十八日「錢鍾書英文文集」の「前文」（英文）執筆。五月「楊絳文集」（全八卷）が人民文学出版社より刊行。八月二十日「尖兵錢瑗」執筆。

二〇〇五年 「走到人生边上」の構想を始める。五月「關於德」「德一」は娘錢瑗の最初の夫。文革中に迫害を受け自殺。

二〇〇七年 八月「走到人生边上——自問自答」商務印書館より出版。

二〇〇九年 二月「剪辮子的故事」執筆。六月三日「錢鍾書生命中的楊絳」執筆。

二〇一〇年 一月十日「漫談『紅樓夢』」、二月二十四日「魔鬼夜訪楊絳」執筆、三月十日「俟為共德」執筆。六月「洗澡」、七月「漢文」執筆。

- 二〇一一年 十二月二十八日「介紹薛鴻時君翻譯的『董貝父子』」執筆。
- 二〇一三年 著作權侵害騒動に巻き込まれる。「鍾書習字」七月十七日執筆。八月八日、楊必訳『名利場』修正改訳に着手。十月十五日「憶孩時（五則）」執筆。
- 二〇一四年 八月『楊絳全集』（全九卷）が人民文学出版社より刊行。
- 二〇一六年 五月二十五日 楊絳没。享年一〇五歳（七月十七日生まれ、満一〇四歳）。
- 二〇二二年 八月『楊絳全集』（全十卷）が人民文学出版社より刊行。